



キリスト教と「エリート」教育：イエズス会教育を中心に

著者	桑原 直己
雑誌名	倫理学
巻	33
ページ	1-20
発行年	2017-03-20
その他のタイトル	"Elite" Education and Christianity : In the case of the Jesuit Educationda
URL	http://hdl.handle.net/2241/00146564

キリスト教と「エリート」教育

― イエズス会教育を中心に ―

一、はじめに

筆者が非常勤で教えているカトリック系大学の授業で『イエズス会学事規程 *Ratio Studiorum*』⁽¹⁾（後述）について紹介したところ、学生たちから、そこに示されているような競争や名譽心に訴えるような教育は「謙遜」を重んじるキリスト教とは馴染まないのではないか、との感想を寄せられた。受講生はキリスト教、特にカトリックに対して比較的理解がある学生である。この学生たちからの感想は、現代日本のキリスト教（カトリック）教会内部における一つの傾向と連動していると言える。日本のカトリック学校に見られる「エリート教育」（正確に言えば「受験校」）志向に対して、教会内部から強い批判の声が上がった時期があった。本稿では、イエズス会を中心にキリスト教教育と「エリート」的教養との関係をめぐる問題を改めて取り上げ、言挙げして検討してみたい。

二、前史

― 教父と自由学芸 ―

歴史を振り返るならば、キリスト教と「エリート」的教養を志向する教育との緊張関係には長い前史がある。「リベラル・アーツ」の語源である *artes liberales*（「自由学芸」）は、古代末期に成立したいわば「ヘレニズム的教養（エリート）教育」のシステムであった。*[liberalis（自由）]*とは「自由人」――典型的には「市民」――の「自由」を意味し、政治への主体的参加資格を意味する。古代という社会的背景のもとでは、「市民」は社会の上層部すなわち「エリート」を意味していた。そうした古代世界に登場したキリスト教徒の知識人である教父たちは、異教的エリートの教養であった自由学芸とキリスト教との間の緊張関係に直面し、両義的な反応を示した。教父たちのうちテルトゥリアヌス（*Quintus Septimius Florens Tertullianus*, 160?・220?）のような人は、

桑原直己

自分自身は自由学芸を学んだ知識人であつたにもかかわらず、自由学芸を中心とする異教的教養に対して拒絶的な態度を示した。

教父時代におけるキリスト教と自由学芸との緊張関係には二つの側面があつたものと想像される。その一つは、固有の教養としての知的資産の蓄積を有さなかつたキリスト者たちにとって、自由学芸が「異教的な」文化に属する教養であつたこと。もう一つは自由学芸を学ぶ人間の動機が、多くの場合個人としての栄達にある、という利己性である。

そうした中で、アウグスティヌス (Aurelius Augustinus, 354-430) はキリスト教が自由学芸を「用いる」という方向性を示し、キリスト教的自由学芸の道を切り開いた。アウグスティヌス自身の生の軌跡は、キリスト教と自由学芸との統合の道そのものであつたと言つて良い。回心前のアウグスティヌスは、まさに個人としての栄達を求めるために自由学芸、特に弁論術を学び、その教師としての成功を追い求めていた。しかし、回心後の彼は、自らの知的能力をもつぱら神に仕えるために注ぎ、自由学芸をキリスト教のために奉仕させる道をとつたのである²⁾。

結局アウグスティヌスは、彼自身の時代における自由学芸に代表される知的教養は、キリスト教にとってその「本質」ではないが、必要有用な「手段」であるという立場を示したと言える。そうした理解は近くは今道友信³⁾にまで及んでおり、キリスト教的自由学芸は、アウグスティヌス以後中世から近代を経て今日に至

るまでヨーロッパ世界における教養教育を支え続けてきている。

「教養」が手段としてでも必要であることは、キリスト教的自由学芸の原点に位置する教父という存在そのものが顕著に示すように、様々な時代と社会との中でキリスト教も指導的な立場に立つ人材を必要としている、というところに帰着するように思われる。問題は、キリスト教的な教育が育てる「エリート」がいかなる動機を持った人間であるかであろう。単なる個人的な栄達を動機とする「エリート教育」はたしかにキリスト教教育には馴染まないかもしれない。

三、イエズス会と教育

(一) イエズス会の教育活動への関与

イエズス会は、近代以降の教育史、特に中等教育の歴史に決定的な足跡を残した修道会である。後述するように、その教育方針はルネサンス的人文主義の影響を強く受けており、たとえばデカルト (René Descartes, 1596-1650) のような人物を輩出するなど、特にカトリック世界における「エリート教育」の担い手として知られている。

しかし当初イエズス会は、教育修道会となる意図は持たず、司牧活動を主要任務とする修道会としての自己認識に立っていた。イエズス会と教育事業との結びつきは、創立者イグナティウス・

デ・ロヨラ(Ignatius de Loyola, 1491-1556)が無学な隠修士として活動するうちに経験した挫折の副次的な結果であったと言える。回心直後のイグナティウスは、身分と家、つまり世俗的な栄達への道を棄てて巡礼者となり、自己放棄と禁欲とを徹底する隠修士的な生活を志していた。やがて彼はマンレサの地で啓示を受けて、後にイエズス会霊性の基礎となる「霊操」の基本的な着想を得た。彼は直ちに親しい仲間たちに対する「魂への奉仕」として霊操の指導を開始した。しかし、ここでイグナティウスは、自分が無学であることに障害を覚えるようになった。たとえば、司祭としての訓練を受けていない彼は倫理神学上の知識を欠いているため、「何が大罪で、何が小罪か」を教える(決定する)ことを禁止された⁽⁴⁾。このことはイグナティウスを大いに落胆させた。こうした挫折を原動力として、イグナティウスは晩学であるにもかかわらず、少年たちの間に交じって学問を究め始め、最終的にはパリ大学で学び当時最高水準の学問を身につけることとなった。彼の周囲に集まった同志たち、つまり初期イエズス会員たちも多くはパリ大学で学び、後から入会する会員にも当時の最高レベルの教育を受けさせようとした。このようにしてイエズス会は当時最高の高学歴者集団として出発したことが、やがてイエズス会と教育事業とを結びつかせる契機となった。

そのプロセスは、イエズス会が「コレギウム Collegium」と呼ばれる施設を持ち、その「コレギウム」が次第に「学校」として

の性格を帯びてゆく形で進展した⁽⁵⁾。「コレギウム」とは、元来は大学の「学寮」を意味していた。そこは、学生たちによる自発的な「復習(repetitio)」「討論(disputatio)」の場ではあっても、正規の教育活動、すなわち「講義(lectio)」の場ではなかった。これを「第一タイプのコレギウム」と呼ぶことにしよう。やがて、学寮たるコレギウムに学生と共に住む教授資格者が、コレギウム内で講義を行うようになると、コレギウムはそれ自体教育機関である「学院」としての性格を帯びる。これを「第二タイプのコレギウム」と呼ぶ。「第一タイプ」「第二タイプ」のコレギウムはイエズス会が成立するはるか以前から存在していた。イエズス会のコレギウムも、イエズス会員としての養成を受けるべく勉強しつつある「修学修士(scholastici)」のための学寮、すなわち第一タイプのコレギウムとして出発している。この第一タイプのコレギウムでは、修学修士たちはその地の大学に通って勉強をしたのである。

第二タイプのコレギウムは、一五四五年、スペインのガンディアに成立する。それは、イエズス会がこの地にコレギウムを獲得したが、近くに有力な大学が存在しなかったため、教授資格を有するイエズス会員が、修学修士たちに正規の哲学関係の講義を定期的に授け始めたことによる。しかし、この第二タイプのコレギウムも第一タイプのそれと同様、イエズス会員である修学修士のための対内的な教育施設を意図したものであった。

そのガンディアアのコレギウムにおいて、一五四六年、イエズス会外部の一般の青少年が修学修士を対象とする哲学の講義を聴講することを希望し、これを受け入れたことにより、第三のタイプのイエズス会コレギウムが成立することになる。こうして、イエズス会コレギウムが対外的な「学校」という性格をも帯びることになった。これは、ヨーロッパにおいて、イエズス会員が会外の青少年に定期的かつ正規に講義を授けるようになった最初の事例である。ただし、一般学生はごく少数であり、毎日、外から通学して来た。こうした第三タイプのイエズス会コレギウムは、あくまでも修学修士が主であり、イエズス会外部の学生はあくまでも例外的に受け入れられるに過ぎなかった。

しかし、一五四八年、シシリア島のメッシーナに、イエズス会外部の学生を教育することを第一の目的とする第四のタイプのイエズス会コレギウムが創設される。これが今日の意味での「イエズス会学校」の草分けである。これは、文法・人文学、哲学・自由学芸、神学の段階的な三課程を併設した本格的なコレギウムであり、メッシーナ市の人々からの強い要望に応える形で創設された。さらに翌一五四九年、同じシシリア島のパレルモにも、メッシーナと同様、もっぱら会外の青少年の教育を目的とした第二番目のイエズス会コレギウムが開設された。

（二）『イエズス会学事規程』

こうした動きと表裏をなす形で、この時期イエズス会自身も教育事業を会の主要な使命と受け止め、これに積極的に取り組む方向へと方針を転換している。イエズス会を創立した初代総会長イグナティウス自身、全てのイエズス会学校のモデル校となるコレギウムをイエズス会本部が置かれているローマに創立する計画を一五四九年に公表した。イグナティウスは一五五六年七月に没しているが、その時点でヨーロッパ各地に合計三十校余りの第四タイプコレギウム、すなわちイエズス会外部の学生の教育を主目的とする今日の意味でのイエズス会学校が開設されており、さらに六校が開校準備中であつた。こうしたイエズス会学校の躍進は当初の予想を上回るものであつた。

このように、予想を超えるイエズス会学校の躍進は、イエズス会自身に教育の分野における自らの使命を自覚させ、後に『イエズス会学事規程』へと結実する修道会としての統一的教育指針策定に向けての歩みの原動力となる。その最初の一步はすでにメッシーナのコレギウムから始まっている。その初代学院長ヒエロニムス・ナダル(Jeronimus Nadal, 1507-80)がメッシーナの学院のために立てた教育計画は、後に多少の修正をほどこされてイエズス会学校全体のモデル校となるローマ学院における教育指針の基礎となった。このローマ学院の教育計画にさらに改訂を加え、イエズス会全体に適用するための統一的教育計画、すなわち

『イエズス会学事規程』の作成が目指されることとなった。中央に設けられた学事規程起草委員会と教育現場との往復を経た上で、『イエズス会学事規程』の最終版は一五五九年のイエズス会第五回総会において承認された。この一五五九年版の『学事規程』は、その後軽微な改訂はされたものの、一七七三年、ヨーロッパ諸国を支配した国教会主義との対立の結果イエズス会が一時解散させられるまでの間、イエズス会学校教育を決定づける指針として機能し続けることとなる。この『イエズス会学事規程』では生徒・学生の競争心・名誉心をインセンティブとする教育方法がよく用いられており、先述の学生たちによる反応を呼ぶこととなったのである。顕著な例を二点挙げる。

① 下級コレギウムにおける「コンツェルタティオ」

下級コレギウム（概ね今日の中高等教育（中学・高校）に相当する）においては、上級コレギウムにおける「討論」につながる「コンツェルタティオ concertatio」という独特の学習方法が用いられていた。「コンツェルタティオ」とは、教師が質問し、質問された生徒が誤ったときに競争相手役の生徒たちが訂正したり、競争者である生徒たち自身が相互に質問を投げかけ合う形で、「勝ち負け」を争う競争的学習方法である。

② 上級コレギウムにおける選抜

上級コレギウム（今日の高等教育である大学に相当する）は、完全な形においてはそれぞれ三年および四年と定められている

哲学課程⁽⁶⁾および神学課程⁽⁷⁾とから構成されている。ただし哲学課程一年目の学生たちは入学後、その後の進路を決めるための試験を受ける。成績上位の者は、哲学の学習を続行させられるが、成績下位の者は倫理神学課程、つまり学問研究ではなく小教区の司牧等に従事するための司祭養成コースに向かわされた⁽⁸⁾。これはイエズス会の高等教育が厳しい共同の選抜の場であったことを示している。

四、「パリ方式」

このような初期イエズス会教育の特徴は、パリ大学で採用されていた教育方法、すなわち「パリ方式 *Modus Parisiensis*」の影響によると考えられている。

当時のパリ大学はルネサンス人文主義による影響を大きく受けていた。ルネサンス人文主義は、キリスト教世界の教育に対する一種の文化的挑戦であり、ちょうど前述の教父たちが自由学芸と直面した際に経験したのと同じような問題が再燃したと見ることが出来る。すなわちそれは、一つにはそこで展開されている教養の内実が異教的であること。もう一つは、それがいわゆる競争的な「エリート」教育であることである。以下にルネサンス人文主義にもとづく「パリ方式」の初期イエズス会に対する影響について、主として Gabriel Codina⁽⁹⁾に依拠しつつ、これら二つの

問題点に即して概観したい。

(一) 人文主義的教育

ルネサンス人文主義の雰囲気の中で、パリ大学のコレギウムは重要な変容を遂げている。文法、修辞学、古典語が重要性を増していった。言語教育に重点を置く「自由学芸」が拡充された形で再興されたと言つて良からう。その結果、ルネサンスの人文主義は人文主義的な文学を学ぶコレギウムに、より上位の学部のための準備教育を与えるものとしての地位を確立した。このモデルをイエズス会員たち（そしてプロテスタントたち）は外部学生のためのコレギウムのために採用し、これが近代の中等教育学校のモデルとなった⁽¹⁰⁾。『イエズス会学事規程』における「下級コレギウム」である。コレギウム生の学年は年齢を考慮するのではなく、知識の水準によつて段階づけられる。授業時間は、当初午前二時間、午後二時間であつたが、特別授業で拡大されていった。授業はミサで始まつた。パリ方式にしたがい、午前三時間、午後三時間となった⁽¹¹⁾。木曜日が週の中での休みの日となった⁽¹²⁾。

「パリ方式」は「帰納法的な方法」、すなわち模範的な古典テキストに親しむ経験を積み重ねる方法であつた。それは、古代の弁論家クインティリアヌスが推奨する「講義（前で読むこと practio）＝現代的に言えば原典講読」がテキストに向かう際に

特に用いられた方法であつた。これは中世の大学以来の最も古典的な授業方法であつた。イエズス会学校では、ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語の三か国語の学習が謳われ、メッシーナにおける、さらには後にローマ学院の方針となった。

「パリ方式」のコレギウムではキケロ、カエサル、ヴェルギウス、ホラティウス、テレンティウス、タキトウス、ホメーロス、ソフォクレス、デモステネスといった異教の著作家たちのテキストが採用された⁽¹³⁾。このことはメッシーナでも同様であつた。合言葉は「最善の著作家たち」であり、模範である原典に直接触れて学ぶことが行われた。

イエズス会がパリ大学から取り入れたもう一つの方法は「暗唱 memorization」である⁽¹⁴⁾。模範的な古典の文章から豊富な語彙を取り入れることが目指された。ペアを組んでのテーマ学習は学習の助けとなり、イグナティウスはフランシスコ・ザビエルやピエール・ファールヴルのような仲間を得た。「パリ方式」は必ずしも競争のみを奨励したわけではなく、協力的な学習活動をも推進する「アクティブ・ラーニング」の要素をも含んでいた。

クインティリアヌスの弁論術が中世論理学と弁証論に取つて代わつた。イエズス会員たちは雄弁をその養成の目的とした。ナダールは「キリスト教的弁論術・修辞学」が異教の古典作者たちとキリスト教的な徳との総合となることを夢見ていた。「徳と文学」はパリの諸コレギウムにおける共通の目的であつたし、イエ

ズス会員たちとプロテスタントたちが彼らの学校で教え込もうとしたことであつた⁽¹⁵⁾。

しかしながら、すべての古典作家たちが推奨されたり啓発的であつたわけではなかつた⁽¹⁶⁾。後述する「新しい敬虔」の系譜に属するスタンドンクのような厳格な人々は「卑猥」と目されるような文学作品を全面的に排斥した。他の人々は異教の作家たちをキリスト教徒の作家に置き換える道を選び、ナダールはその方向をとつた。彼は人文主義者であつたが、教父の研究をも尊重していた。

ルネサンスの人文主義がパリはじめヨーロッパを席捲したが、新思潮は危険視された⁽¹⁷⁾。イグナティウス自身、すでにこのことに伴う困難をアルカラとサラマンカでの審問で経験していた。人文主義的な路線を採用することには危険があつた。イエズス会員たちは異教の人文主義をキリスト教化する課題に直面した。イエズス会員たちは抜粋する古典の版を選ぶ道をとつた。「著作家の選択」の問題は、初期イエズス会コレギウムにおいて常に議論的であつた⁽¹⁸⁾。

(二) 競争的教育方法

「はじめに」で触れたような形で問題とされた競争的教育方法もまた、「パリ方式」の特徴であると言つて良い。

入学には入学試験が課される。これは志願者が文法における十分な基礎を有しているか否かを確認することを意図している。

褒賞を与えること、競争が教育において重要な役割を演じている。「健全な競争」という考え方は『イエズス会会憲』にも導入されている。イエズス会学校で導入された競争的教育方法としては、具体的には前述の「コンツェルタティオ」、討論、その他スコラ的な訓練がなされた。

「パリ方式」の典型的な特徴は学生のクラスわけである。文法のクラスは人数が多いので、十人ごとの班(*decuriae*)に分け、班長は *decurio* と呼ばれた。班長は教員による学生管理の職務を一部補助する任務を与えられ、一定の名譽ある立場とみなされていた。この班の制度はパリ大学モンテギユ学寮に由来するが、その前史はモンテギユ学寮を介してさらには後述する「共同生活兄弟会」の学校の影響にまで遡る⁽¹⁹⁾。

基礎的な学習段階を合格しない限り、誰も進級を認められなかつた。イグナティウス自身、このことの必要性を勉強の方法が欠如していたスペインで自身の体験から学んでいた。

実際の教育方法は「訓練 (*exercitatio*)」であつた。まず、「講読 (*lectio*)」は中世の大学以来の伝統的な講義の授業であつた。学生たちは読み、聴き、ノートをとるといった活動を行った。他に多彩な学習活動が開発された。

その一つはラテン語で「*questiones* (問題)」と呼ばれる方法

で、テキストの適切な理解のために教師によって計画された質問により展開される。

「討論 [disputations]」は中世以来パリの学生たちが没頭した訓練であった。「討論」の諸構成要素についての特別な語彙は、自由学芸や神学のみならず、より基礎的な文法と人文学の学習にも用いられた。

これらの方法の基礎と淵源とはスコラ学にあった。中世末期以来精緻に走りすぎたスコラ学の不毛な乱用には批判もあったが、イエズス会員たちは「パリ方式」の中で、スコラ学の精髓の中に伝えられていたアクティブな学習方法の意義を認めていた⁽²⁰⁾。

初期イエズス会学校では「パリ方式」が採用されたが、その動機はナダールらによる単なる母校愛⁽²¹⁾の発露ではなく、イエズス会による明確な選択の結果であった。イエズス会員たちはパリの他にはイタリアの大学で学び、その結果、パリ方式とイタリア方式が比較されることになった。パリ大学は教授中心の大学であるのに対して、イタリアのボローニヤ大学は学生中心の大学であった。ボローニヤ、パドヴァ、ローマのサピエンザで学んだ初期イエズス会員たちは、学生主導で体系的に欠いた教育計画を好まなかった⁽²²⁾。ボローニヤ系のイタリアの大学、たとえばパドヴァ大学で学んだイエズス会員たちは、「訓練」とアクティブラーニングの欠如による「時間の浪費」について不平を述べている⁽²³⁾。これに対して、中央集権的なパリ大学は教育計画が体系的であり、

イエズス会員たちは勉学にとつて効率的なパリのシステムの方を好むようになった⁽²⁴⁾。

先述したとおり、最初の第四タイプ、すなわちイエズス会外部の青少年を対象とする今日的な意味でのイエズス会学校の草分けとなるメッシーナのコレギウムはナダールによつて開かれ、イエズス会教育の最初の実験場となっていた⁽²⁵⁾。ナダールが「パリ方式」をメッシーナの規則として採用して以来、「パリ方式」はイエズス会全体の方針となった⁽²⁶⁾。要するに、イエズス会員たちが競争的教育方法を含む「パリ方式」を採用したのは、経験の蓄積によつて「時間を浪費することなく」学習効果をあげようとした結果であった。「競争的教育方法」の意味も、インセンティブを与えることにより教育効果を上げるための手段であったと考えられる。

(三) 共同生活兄弟会⁽²⁷⁾の影響

ここでさらに、イエズス会による「パリ方式」採用の前史として、パリ大学モンテギユ学寮を介しての「共同生活兄弟会」の学校の影響を指摘することができる⁽²⁸⁾。共同生活兄弟会は、靈性の面でもイグナティウスに大きな影響を与えた「新しい敬虔 [devotio moderna]」という宗教的な運動の担い手たちによる共同体である。「新しい敬虔」とは、「十四世紀末のネーデルラントで形

成され、十五世紀にベルギー、フランス、スペイン、イタリア等のヨーロッパ諸国、特にライン河に沿ってドイツに進出したキリスト教靈性の刷新運動」⁽²⁹⁾である。「新しい敬虔」の創始者フロート(Gert Groote, 1340-1384)の靈性の特色は、厳しい自己否定により、真にイエス・キリストに従うために自己の内面を徹底的に純化することにあった。フロートとその同志たちの活動は、ネーデルラントおよびドイツ北部で歓迎され、一四八〇年頃以降、各地で共同生活兄弟会の家が作られていった。この共同体は共同生活は営むものの、既存の意味での修道会ではなかった。会員は修道服を着用せず、既存の修道会に認められていた各種の特権を求めることもせず、貧者を助け、一般信徒も聖職者と生活を共にして上述の靈性を深めることを追求した。

十四世紀後半までには、ネーデルラントの多くの街には十代の少年のためのラテン語学校が開かれていた。これらの学校は、司教座聖堂参事会、都市、教区によって創立され、維持されていた。デーフェンテルの司教座聖堂付属学校とツヴオレの市立学校は特に有名であった。リエージュ、オランダ、ウェストファリア、そして低地ライン地方などのあらゆる近隣地域から多くの若者たちが集まっていた。学資は両親が負担するが、家庭の経済状況によつてはそれは重い負担を意味していた。教育は、彼らの息子たちの名声と将来を高めるものであった。しかし、「新しい敬虔」の兄弟たちの目には、両親たちの思いとは反対に、こうした数多

くの生徒たちは、「はかない野心と出世第一主義の世界に迷い込もうとしている少年たち」と映った。これらの学校の十二〜十九歳の生徒たちは、「新しい敬虔」のほとんど最初期からその重要な一翼を担うようになっていった。ラテン語学校と「新しい敬虔」の兄弟たちとの結びつきは深い。特にツヴオレの学校長セーレ(Johannes Cele, 1345?-1417)は、フロートと親交のあった人物として知られている。

学寮には一人の「新しい敬虔」の兄弟が監督として配属され、「寮監 procurator」と呼ばれた。彼らはしばしば「学院長 rector scholarium」とも呼ばれたが、兄弟の家の院長と混同してはならない。寮監として兄弟は学生の衣食住の世話をし、学生は兄弟の敬虔な生活に接することで大いに感化を受けた。「新しい敬虔」の兄弟は学校の教員ではなく、このようにして生徒たちの日常生活を世話することによつて「人格形成」に貢献するのが当初の役割であったが、「学校教育」と「人格形成」という組織的に異なつた目的はやがて必然的に混交された。寮監の兄弟は、実際には勉強を手伝つた。生徒たちは午前中、学校へ出かけた後、午後には寮に戻つて「復習 repetere」を行つた。

フロートの協力者であつた前述のツヴオレ学校長セーレは、パリ大学の学制を参考にして人文主義的な教育課程を採用したが、このことが「新しい敬虔」と人文主義との結合をもたらすこととなる。デーフェンテルの学校はヘギウス(Alexander Hegius、

1433-1498)が校長であった時代にはドイツ人文主義の中心となった。彼は、イタリアの人文主義に倣い、ラテン語とギリシア語の教育に力を入れた。多くの卒業生が学校教師になったため、ヘギウスの教育方針は広く普及することとなる。

「新しい敬虔」と人文主義とは、相補的な関係の中で発展していった。ドイツやネーデルラントは民衆の信仰心が篤い地域である。そのような地域に、革新的な知的運動としての人文主義が根を下ろすことができたのは、それが「新しい敬虔」と結びついていたためである。他方、「新しい敬虔」の担い手であった兄弟会や修道院は、ラテン語学校の卒業生のなかから会員を得た。そして、十五世紀には、ネーデルラント全域、ドイツ、ポーランドの各都市に百三十以上の家を擁し、教育と宗教との分野で活躍することができた。

メッシーナにおけるイエズス会学校の教育課程と共同生活兄弟会の学校であるリエージュの聖ヒエロニムス学園のそれとの間の共通点が指摘されている。具体的には、生徒を十人の班にわけ、先述の *decurie* 制度、次の段階に進む際に受ける進級試験、語彙ノート (*trapiarium*)、学級委員⁽³⁰⁾、そして入念な宗教教育⁽³¹⁾などである。「新しい敬虔」の宗教運動は厳格さをもって知られている⁽³²⁾が、以上の経緯により人文主義的な学校教育と結びつきを示していた。

「新しい敬虔」の精神にもとづくモンテギュー学寮での訓育は

非常に厳しいものであった⁽³³⁾。このことは、兄弟の罪を正すことは愛徳の業であるとする「兄弟的矯正 *correctio fraterna*」の伝統による。具体的には、学生たちには武器、遊具の携行は禁止されていた。また、教室外でラテン語以外の言語を用いると通報された⁽³⁴⁾。体罰も行われていた。モンテギュー学寮で学生として学んでいたイグナティウス自身、当時四十歳近くであったが、学友の勉強から気を散らせた廉で公開で鞭打たれた。イエズス会も体罰を導入したが、「他の説得手段が不調に終わった場合の最終手段としてのみ行うこと」「矯正者はイエズス会員ではなく、雇用された者であること」という安全手段を講じていた。

イエズス会学校における「バリ方式」の起源を「共同生活兄弟会」の学校にまで遡るならば、学校で学ぶ学生たちや親たちによる「個人的な栄達」志向の動機との対決が当初から問題となっていたことがわかる。人文主義的教育を推進する学校と「新しい敬虔」による厳格な宗教性とが結びつくことにより、人文主義的が素材とする「古典」の異教的性格、学校で学ぶ学生たちやその親たちの個人的な栄達を目指す「エリート」志向の両面において先述の人文主義教育とキリスト教教育との緊張関係が一つのバランスのとれた均衡を示していたのではないかと想像される。そして、初期イエズス会学校は、「新しい敬虔」の「共同生活兄弟会」から、そのような意味での教育理念を受け継いでいたと考えられる。

五、第二バチカン公会議以降のイエズス会教育の歴史的展開

以上、初期イエズス会学校に対する「パリ方式」の影響の意義について歴史的に検討してきた。ここで改めて以上の概観を踏まえつつ、「はじめに」の問題意識に立ち戻り、現代におけるイエズス会と「エリート教育」との問題についても検討を加えることとしたい。

(一) 現代におけるイエズス会教育の転換？

「はじめに」で述べた「現代日本のキリスト教教会内部における一つの傾向」は、カトリック世界に関して言えば第二バチカン公会議後の教会の動向に対応している。そうした中で、イエズス会も方向転換を遂げたとされているが、その転換点と目されているのが、一九七三年、スペインのバレンシアで開かれたヨーロッパ・イエズス会学校卒業生の大会で、当時のイエズス会総会長ベドロ・アルペ神父が行った講演である。この講演でアルペ総会長は、第二バチカン公会議後のカトリック教会の使命が「正義の推進と抑圧された人々の解放に関わることを含むものであると認識するようになったことを受けて、イエズス会教育も同じ路線を目指すべきである」との姿勢を示した。「私たちイエズス会員は、

正義のためにあなた方（卒業生）を教育してきたでしょうか」と問い、これに対して、「いいえ、そのようには教育してきませんでした」と認め、現代のカトリック教会とイエズス会がその使命として新たに認識した社会正義の問題に関わる教育の必要性を訴え、*“men for others”*（他者のために生きる人間）の育成こそ、イエズス会教育の目的であると表明した⁽³⁵⁾。

このアルペ総会長による講演と“men for others”という標語の意味は、第二バチカン公会議以降、カトリック教会が社会正義との関わりを自らの現代的な使命として認識するようになった文脈を背景としてのみ理解することができる⁽³⁶⁾。アルペ総会長は第二バチカン公会議後、その精神にもとづき一九七一年に出されたシノドス文書『世界の正義』に触発されている。この「転換」がどれだけ「全面的」なものであるか、という点についての評価は一つの検討課題である。以下、第二バチカン公会議前後のイエズス会の動きを概観するとともに、このアルペ講演を契機にイエズス会教育がどこまで変化し、またどこまでの伝統との連続性を保っているのかについて検討したい。

(二) 社会正義をめぐる現代カトリック教会とイエズス会

まず、上述アルペ講演が「第二バチカン公会議後のカトリック教会の使命が「正義の推進と抑圧された人々の解放に関わるこ

と」を含むものであると認識するようになった」としている点について解説しておく。一九六二年、教皇ヨハネ二十三世のもとで開かれ、一九六五年にいたるまで後継のパウロ六世によって遂行された第二バチカン公会議は、カトリック教会が近代化以降の現代世界の動向に対して閉鎖的であるとされてきたそれまでの姿勢を一挙に改め、「現代化」を標語に自己刷新に向かった転機としてよく知られている。そうした中、「社会正義」は『現代世界憲章』などの文書の中で教会が取り組むべき課題として主題化されている。

しかしながら、社会正義の問題に対するカトリック教会の取り組みには十九世紀末にまで遡る前史がある。一八九一年五月十五日、時の教皇レオ十三世が出した回勅『レールム・ノヴァールム *Reum Novum*』はカトリック教会に社会問題について取り組むことを指示した最初の回勅である。この回勅は、「貧者には忍耐を、富裕者には慈善を説く」という教会従来の姿勢を改め、労働者の貧困や境遇の改善は「憐れみ」に属することではなく社会正義の問題であるとし、「人格の尊厳と基本的人権を認め、擁護し、愛する」ことを基本とした社会の変革や社会問題への主体的な取り組みを指示している。「資本主義の弊害と社会主義の幻想」という副題が示すとおり、「少数の資本家が富の多くを占有する行き過ぎた資本主義によって、労働者をはじめとする一般庶民が搾取や貧困、悲惨な境遇に苦しむあまり無神論的唯物史観を基調と

した社会主義（のちの共産主義）への移行を渴望しているが、それで人間の社会が実現するというのは幻想である」として、資本主義と社会主義（共産主義）との双方に対して批判的な視線を向けている。

『レールム・ノヴァールム』の問題意識はその後の教皇たちにも引き継がれ、ピウス十一世は『レールム・ノヴァールム』の四十年後の一九三一年に回勅『クアドラジェジモ・アンノ *Quadagesimo Anno*³⁷⁾』を出して労働者の尊厳を訴え、『レールム・ノヴァールム』の七十年年にあたり公会議直前となる一九六一年には、ヨハネ二十三世が回勅『マーテル・エト・マジステラ *Mater et Magistra*』を出している。第二バチカン公会議における教会刷新は、こうした前史を受け継ぎながら、その精神である社会正義への取り組みを全面に出したものとして理解されている。

一九六五年五月七日、第二十七代ヤンセンス総会長の死去にもない開催されたイエズス会第三十一回総会では、公会議による「教会の刷新の歩みを横目で眺めながら、第二バチカン公会議の姿勢をイエズス会にも持ち込もうとした」³⁸⁾。そのための責任者として総会長に選出されたのが、それまで日本管区長をつとめていたベドロ・アルペ神父であった。

その後「一九七四年、アルペ総会長は、第三十一回総会から十年が経過し、その間、さまざまな動揺を経験したイエズス会が、どのような刷新のプロセスを経てきたのかを検証し、さらにまた、

現代においてイエズス会の本質的な使命が何であるかを再検討するために、総会を開くことにした。それが第三十二回総会である⁽³⁹⁾。この総会は、アルペ総会長が「men for others」という言葉を最初に語った例の講演の翌年にあたることに注意された。

第三十二回総会は一九七五年三月七日、閉幕したが、この総会で、イエズス会の現代的使命が「信仰への奉仕と正義の推進」にあると宣言する「第四教令」が出され、イエズス会教育にも大きな影響を与えることになる⁽⁴⁰⁾。アルペ総会長は、一九八〇年に十数人からなる国際教育使徒職委員会のメンバーたちに、「中等教育の展望」というテーマで講話を行い、これを受けて同委員会はその後一九八六年、『イエズス会教育の特徴』を作成した⁽⁴¹⁾。さらに、イエズス会教育のより具体的な「イグナチオ的な教授方法」を示すべく、一九九三年にイグナティウスが霊操を指導するさいに与えた方法や注意を基礎としてまとめられた教授方法の根本原則が『ともに歩む指導法 *Ignatian Pedagogy*』である⁽⁴²⁾。今日のイエズス会学校の基本的方向はこれらの指針に即していると言つてよからう。

（三）「社会に仕える指導者」——今日のイエズス会学校の教育

目標

ここで、アルペ講演を契機にイエズス会教育がどこまで変化し、

またどこまでそれまでの伝統との連続性を保っているのかについて検討したい。

まず、連続性の面から見ると、アルペ講演の精神を受けて作成された『イエズス会教育の特徴』においても、イエズス会教育が「卓越性」を求め、社会の「指導者を育成すること」を「謳い続けていることが指摘できる⁽⁴³⁾。しかしながら、育成すべき「指導者」像に変化がある点に注意しなければならない。

二〇、イエズス会教育の伝統的な目標は「指導者」を養成することでした。その「指導者」とは、社会の中で責任ある地位を引き受けることによって他者によい影響を与える人々を意味します。この目標は、ときには行き過ぎて修正しなければならぬこともありました。かつてどのような誤解があったにせよ、現在理解されているイグナチオの世界観の中のイエズス会教育の目標は、社会的・経済的エリートを育てることではなく、社会に仕えるための指導者を育てることです。そのためイエズス会学校は、生徒たちが将来どのような地位についたとしても、神の国に奉仕する者として、すべての人のために他者とともに働くことができる精神と心を育てていきます⁽⁴⁴⁾。

『イエズス会教育の特徴』は、「社会的・経済的エリート」を

育てることを否定し、「社会に仕えるための指導者」を育てることを自らの教育目標としている。「社会に仕えるための指導者」という表現は、「指導者」という点である種の「エリート」ではあっても、“men for others”というアルペ講演の精神が込められていると言える。

『イエズス会学事規程』以来の競争的教育方法についての言及は微妙である⁽⁴⁵⁾。イエズス会学校が「競い合うゲームからくる刺激を評価する」ことは否定していない。しかし「行き過ぎた競争」が「個人主義や消費主義、なりふりかまわず成功を求める風潮」については批判的であり、「他者とともに働き、互いを思いやり、そして互いに助け合う中で示される他者への献身的な奉仕において秀でる」ことを生徒たちに勧める、と述べている。これはIIOが提示している“men for others”というアルペ講演の精神が込められた「社会に仕えるための指導者」という教育目標につながるものと考えられる。

以下に、こうした現代イエズス会学校の基本的方向の背景となるいくつかの問題点について簡単に触れておきたい。

(四) 近代以降の国家社会において「私立学校」であること

まず、イエズス会教育の「変化」、アルペ講演が示唆するようなイエズス会の「自己反省」の背景として、社会的変化を考えな

ければなるまい。

近代社会を特徴付ける要因としてまず念頭に置くべきなのは、国家の台頭とこれに付随した社会全体の世俗化である。一般に近代以前は多くの社会において教育は宗教が担っており、欧米社会においてはその担い手はキリスト教（カトリックにせよ、新興のプロテスタントにせよ）であった。しかし近代以降、教育は国家の管理下に置かれることになり、それぞれの国家による制度的枠組みの中で展開されるようになった。これは現代日本人にとっては当たり前の所与のように感じられるかもしれないが、このことは「近代」以降に特徴的であることは忘れてはならない。

近代社会のもう一つの特徴は、資本主義経済のもとでの社会的・経済的格差の拡大である。『レールム・ノヴァールム』が出されたのはマルクスの『資本論』（一八六六年）の二十五年後にあたる。二十世紀は資本主義が抱える問題についてマルクス主義の影響下に展開した社会主義（共産主義）による克服の実験の世紀であったが、この実験はほぼ挫折に終わり、経済的格差の拡大という問題は今もなお現代世界における大きな問題であり続けている。

このような社会の変化の中で、教育は「国家のため」「労働力」を育成することを目的とする営みとなった。「競争」の意味も変化したように想像される。一例は「ベル・ランカスター方式」（「助教法」Monitorial System）と呼ばれる十九世紀のイギリスで盛ん

になった教育方法⁽⁴⁶⁾である。「競争を促進し、学習を容易にするために学校すべてがいくつかの学級に分けられ、そのおのの学級に助教 (monitor) が配当される。それぞれの学級は熟達度が均一な何人かの少年から成っている。子どもはすべて学級に分けられ、そこでいっしょに教えられる」。「助教」とは選ばれた成績優秀な年長の生徒が担当する学級の生徒たちを教える補助教員である。ここでは少ない数の教師で大量の子どもたちに教えることを可能とする「教育の効率」が追求されている。

イエズス会学校などカトリック学校のみならず、キリスト教系の学校はすべて、そうした近代以降の社会の中で「私立学校」としての制約のもとに置かれている。『イエズス会教育の特徴』によれば、今日のイエズス会教育は「昔と違う現実」に直面している⁽⁴⁷⁾。

先に見たとおり、初期イエズス会学校は教室内に競争的教育方法を取り入れ、厳しい選抜を行っていたが、ここで注意しておくなければならないのは、その競争が身分と階級とを超えていた、という事実である。つまり、イエズス会学校はあらゆる社会的階層の学生にも開かれていた⁽⁴⁸⁾。学生の資質は厳しく選別されたが、一旦受け入れられた学生たちはその出自の貴賤・貧富を問わず平等に扱われた。

このことを可能とする条件として、初期イエズス会学校では授業料を徴収しなかったことが指摘されている⁽⁴⁹⁾。無論、そのため

には経済的な基盤が必要であった。イエズス会は貴族たちや社会の富裕層からの寄付によって学校を経営していた。その意味では、当時のイエズス会の思想は社会的に保守的であったと言ってよい。当時の身分的、階級的な社会構造を変革することは考えていなかった⁽⁵⁰⁾。その代わり、教室の内部ではあらゆる社会的階層の学生たちに「機会均等」が保証されていたのである。

先述の通り、近代以降の世俗化された社会の中でキリスト教的な学校は「私立学校」として生きてゆかなければならなくなった。イエズス会学校にとつては、授業料を徴収することは近代社会に適応するための大きな決断であったようである。

先に触れたガンディアでの事例において、イエズス会コレギウムが最初に受け入れた外部の一般学生および父母が求めているものは「良質の教育」であったであろう。彼らの多くは結局個人的な栄達を動機として「エリート教育」を求めていたかもしれない。イグナティウスとイエズス会にとつて、教育面でも靈性面でも先駆者であったフロロテが関わった学校も、そうした学生たちや親たちとの動機と相対していた。

授業料を徴収する結果、親や子どもたちの個人的な要求に応えることが求められ、「栄達のためのエリート教育」の方向へのベクトルに掉さすことが余儀なくさねなくなる。また、学費がまかなえるだけの社会的階層からしか学生を受け入れにくくなり、その結果、経済格差による教育格差という社会的問題構造に

組み込まれてしまうことになる。おそらくこのことが「イエズス会員は、正義のために教育してこなかった」というアルペ総会長による反省の大きな要因だったのではないかと想像される。『イエズス会教育の特徴』が否定されるべきものとして「社会的・経済的エリート」という言葉を用いていることも、このことを示しているように思われる。

そうした問題に直面すべく、今日のイエズス会はアメリカを中心に、貧しい階層の学生たちの教育を目的とする「クリスト・レイ・スクール Cristo Rey High Schools」といった新しい学校教育への取り組みを試みている。

(五) イエズス会教育の源泉としての霊操（靈性）

他方、特に第二バチカン公会議後における現代のカトリック教会の大きな変化として、修道者や司祭の数的な減少という問題が深刻化している。この問題は、イエズス会教育における「連続性」、そのアイデンティティについての視座を求めているように思われる。

日本ではプロテスタント系のキリスト教学校でも学校のアイデンティティを支えるキリスト者の教員が減少していると聞く。しかしながら、イエズス会学校をはじめ、カトリック系の学校ではさらに大きな問題として、第二バチカン公会議後、司祭・修道

者が減少し、多くの学校ではカトリック学校としてのアイデンティティの危機が叫ばれている。イエズス会も例外ではなく、二〇〇八年一月七日に開催された第三十五回総会の頃から、イエズス会員の急激な減少と高齢化に対応して、イエズス会の事業体をいかに運営するかという問題がクローズアップされてきた。イエズス会員と非イエズス会員との「協働」が必然のこととなった中で、事業体が「イグナティウスの」であり「イエズス会的」と言われるためには、何が必要なのかが問われるようになった⁽⁵¹⁾。

時代が変化し、しかもその中でこれまで学校のアイデンティティを支えてきた修道者たちが減少する中で、これからのアイデンティティを支えるのは修道者以外のメンバー（教員のみならず卒業生や学生も含まれるであろう）となる。その際の土台となるのは学校創立の「理念」であるが、カトリック学校の場合、それは設立した修道会の「靈性」ということになる。イエズス会の場合、「あらゆるイグナチオ的事業の中心にあるのは、イグナチオの『靈操』である」⁽⁵²⁾ということになる。

イエズス会教育の「変化」が謳われる際にも、イエズス会教育を支える根本が「靈操」にあることはいささかも変わることがなかった。イエズス会教育が「世界における正義の要求に耐え得るものであるよう」適応する必要を説いている一九七三年のアルペ講演そのものにおいても、そのことを可能とするのは『靈操』の精神であることが明言されている⁽⁵³⁾。

六、結語

多くの人たちにとって「謙遜」や「自己放棄」を説くキリスト教は「エリート教育」とは馴染まないように見える。本稿では、キリスト教と「エリート教育」との関係について三つの時代における取り組みを取り上げて概観してきた。すなわち、異教的エリートの教養であつた自由学芸と神父たちとの緊張関係、ルネサンス人文主義の影響下における初期イエズス会学校の教育方針、そして同じイエズス会学校が、近代以降の資本主義社会における経済格差による教育格差の問題に直面しつつある現代における対応である。以上の概観から、キリスト者たちがそれぞれの時代の文脈の中で直面する課題と取り組みながら、キリスト者としての自らのあり方と調和するような形で、「優れた人間」、指導的立場に立ちうる人間を育てるための努力を重ねていた姿が明らかになったように思われる。

註

- (1) 『イエズス会学事規程』とこれにもとづくカリキュラムについては以下を参照。
拙稿『イエズス会学事規程』におけるイエズス会学校（清泉女子大学キリスト教文化研究所年報第一七巻、二〇〇九年、所収）
アウグステイヌスおよび神父時代における自由学芸については

以下を参照。

拙稿「アウグステイヌス『キリスト教の教え』における自由学芸—キリスト教的人文主義の源泉—」（清泉女子大学人文科学研究所紀要第三二号、二〇一一年、所収）。

今道友信「カトリックの教養教育」（カトリック教育学会編『カトリック教育研究』第二五号、二〇〇八年、所収）。

イグナティウス・デ・ロヨラ『自叙伝』七〇。
初期イエズス会コレギウムの発展史については以下を参照。

高祖敏明「草創期のイエズス会学校—コレギウムの誕生・発展史を中心に—」（上智大学教育学科『教育学論集』第一四号所収、一九八〇年）。高祖敏明「原初期イエズス会学校の教育—メシナのコレギウムを事例として(一)、(二)—」（上智大学教育学科『教育学論集』第一五、一六号、一九八一、一九八二年）。

『イエズス会学事規程…管区長に関する規則』第一七条。

『イエズス会学事規程…管区長に関する規則』第九条。

『イエズス会学事規程…管区長に関する規則』第一九条。

Gabriel Codina, S.J., "The "Modus Parisiensis", *The Jesuit Ratio Studiorum 400th Anniversary Perspectives*, edited by Vincent J. Duminuco (New York: Fordham University Press, 2000).

Codina, op. cit. p. 39.

Codina, op. cit. p. 35.

Codina, op. cit. p. 36.

Codina, op. cit. p. 40.

Codina, op. cit. p. 38.

Codina, op. cit. p. 40.

Codina, op. cit. p. 41.

Codina, op. cit. p. 39.

(17)(16)(15)(14)(13)(12)(11)(10)

(9) (8) (7) (6)

(5) (4) (3)

- (18) Codina, *op. cit.* p. 41.
 (19) Codina, *op. cit.* p. 42.
 (20) Codina, *op. cit.* p. 37.
 (21) ただし、イグナティウスおよび初期イエズス会士たちが最初にパリ方式に触れたのはパリ大学ではなく、彼らはすでにスペイン、すなわちパリ大学をモデルにシスネロス枢機卿が設立したアルカラ大学においてすでに「パリ方式」を体験していた。
cf. op. cit. p. 38.
 (22) Codina, *op. cit.* p. 32.
 (23) Codina, *op. cit.* p. 30.
 (24) Codina, *op. cit.* p. 32.
 (25) Codina, *op. cit.* p. 28.
 (26) Codina, *op. cit.* p. 31.
 (27) 「新しい敬虔」「共同生活兄弟会」およびこれらと学校教育との結びつきについては以下を参照。拙稿「G・フロレーテとその後継者たち—devotio modernaの霊性史—」(筑波大学倫理学研究会編『倫理学』第二十九号、二〇一三年、一〇一—一三頁)
 Codina, *op. cit.* p. 42.
 (28) 上智学院新カトリック大事典編纂委員会編、『新カトリック大事典』研究社、一九九六—二〇一〇年、見出し「デヴォテイオ・モデルナ」。
 Codina, *op. cit.* p. 42.
 (31) Codina, *op. cit.* p. 43.
 (32) Codina, *op. cit.* p. 44.
 (33) Codina, *op. cit.* p. 34.
 (34) Codina, *op. cit.* p. 35.
 (35) ペドロ・アルベ「MEN FOR OTHERS」瀬本正之訳(梶山義夫監訳『イエズス会教育の特徴』イエズス会中等教育推進委員会編、ドン・ボスコ社、二〇一三年、所収)一三—一四頁。
 (36) 李聖一「イエズス会教育の動向—現代イエズス会学五十年の歩みのなかで—」(梶山義夫監訳『イエズス会教育の特徴』イエズス会中等教育推進委員会編、ドン・ボスコ社、二〇一三年所収)。
 (37) 教皇の回勅は、そのラテン語本文の書き出しがその呼び名となる習わしであるが、「Quadragesimo anno」とはまことに「『レールム・ノヴァールム』の四十周年の記念に」という意味である。
 (38) 李前掲稿、二二五頁。
 (39) 李前掲稿、二二六頁。
 (40) 李前掲稿、二二九頁。
 (41) 李前掲稿、二二六頁。
 (42) 李前掲稿、二二六、二二七頁。
 (43) 梶山義夫監訳『イエズス会教育の特徴』イエズス会中等教育推進委員会編、ドン・ボスコ社、二〇一三年、106、107。
 106. イエズス会教育は
 ・教育の中で卓越性を求めます

・卓越性を証します

107. イエズス会教育では、学校生活の全分野に卓越性という基準が適用されます。生徒が可能なかぎりあらゆる面で成長をとげると同時に、貧しい人のニーズを優先的に考えて、正義の促進のためなら自分の利益でも惜しまないような心をもって他者に奉仕する価値観や献身的な姿勢を育成することを狙っています。学術的卓越性の追求はイエズス会学校にふさわしいことですが、それはあくまでも人間的卓越性の大きな枠組みの中でのことです。

『イエズス会教育の特徴』110°

(45) (44)

『イエズス会教育の特徴』112°

『学事規程』(Ratio Studiorum)は、競争(個人同士というよりもグループ同士の競争)を、学問的成長を効果的に刺激するものとして勧めています。ところが、今日のイエズス会教育は昔と違う現実と直面しています。行き過ぎた競争が、個人主義や消費主義、なりふりかまわず成功を求める風潮をもたらしています。イエズス会学校では、競い合うゲームからくる刺激を評価すると同時に、他者とともに働き、互いを思いやり、そして互いに助け合う中で示される他者への献身的な奉仕において秀でるよう、生徒たちに勧めます。「キリスト者としての証しを立てたい」という望みは、……成績を争うような雰囲気の中や、個人の資質が他者の資質との比較によってのみ評価されるようなところ

では育ちません。むしろ、どのようにして他者の役に立つか、どのようにして他者に仕えるかを学ぶような雰囲気の中でのみ育つでしょう。

(46) ランカスターによる助教法については以下を参照。

Rayman, Ronald, "Joseph Lancaster's Monitorial System of Instruction and American Indian Education, 1815-1838", *History of Education Quarterly*, 21 (4) (Winter 1981): 395-409.

(47) 梶山義夫監訳『イエズス会教育の特徴』112°

(48) John W. O'Malley, S.J., "How the First Jesuits Become Involved in

Education", *The Jesuit Ratio Studiorum 400th Anniversary Perspectives*, edited by Vincent J. Duminuco (New York: Fordham University Press, 2000) p.67.

(49) John W. O'Malley, S.J., *The first Jesuits*, (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1993) p.226.

O'Malley, *op.cit.* p.211.

(50) 李前掲稿、一三五頁。

(51) ibid.『イエズス会第35回総会教令』9°

(52) アルベ前掲稿一一四、一一五頁。

(53) 私たちを新しい状況に適応させてくれる何かによって、私たちは、できます。この何かとは何なのでしょう。それは、神の意思を絶えず探し求める精神です。

……

それは、聖イグナチオの『靈操』から私たちが受け継いだ遺産です。まさに、それは、私たちに神の意思に適った具体的な決定を為さしめる一つの方法です。それは、置かれた状況の中で実践可能なすべての選択肢を見渡させ、多くの可能性を包み込む包括的な展望を開示しつつ、神ご自身がその途方もない創造性のすべてをもって示してくださる見取り図を私たちの歩むべき道として選び取るよう、導いてくれます。

イエズス会と、イエズス会が光栄にもその教育に携わらせてもらう人たちに、多面的な展開への潜在能力や、時のしるしに適うあらゆる奉仕への応需性 *readiness* *availability* を賦与するのは、他でもないこの「不偏心 *indifference*」 神の意思以外の何ものにも縛られないという意味での、偏りの無さ、なのです

(くわばら・なおき 筑波大学人文社会系教授)